

天瀬裕康先生の新作『梶山季之の文学空間』が上梓された。

先生はヨーロッパ中世を舞台とした「シック調の小説」や、ヒロシマの被爆体験をテーマとした長編など、さまざまな分野で健筆をふるつておられるが、その一方で小酒井不木などの評伝においても秀れた業績を残されていひ。

この度、梶山季之が採り上げられたのは、韓国生まれの梶山が終戦後広島に引き揚げ、広島高等師範（後の広島大教育学部）で青春を過ごしたことに端を発しているらしい。

「まえがき」には、平成十九年に梶山の三十二回忌に因んだ記念講演会やシンポジウムが、広島平和記念資料館で催され、天瀬先生も参加、推進されたと記されている。

さて梶山文学の評価だが、実は私は彼

の作品をまったく読んだことがないので、残念ながら言及する資格を持っていない。

もちろん「黒の試走車」や「赤いダイヤ」などの書名は知っているし、彗星のようになに文壇を駆け抜け、四十五歳でなく

なった一世の流行作家という

「」のよひに比較的身近な感があり、しかもその作品とは無縁といつ立場でもつて、天瀬先生の著作を拝読しているどその詳細を極めた資料の集積の上に、次第に梶山季之の人間像が浮かび上がつてくる。

そして梶山が最後に取り組んだ「積乱雲」の内容も、おぼろげながら想像されるのである。

四十五歳で死「」した作家としては、三島由紀夫、小糸虫太郎などが挙げられるが、いずれもこれからという時期に斃れているのが、惜しまれでならない。

天瀬先生の『梶山季之の文学空間』は梶山に関心がなくても、充分鑑賞に値する力作であり、秀れた評伝、文学論として、広く江湖に推奨するものである。

（渓水社・2700円+税）

詳細を極めた資料の集積 人間像や作品の内容も浮かぶ



評 山 田 遼